

『遊び』を通じて、子どもたちの ストレス・ケアを実践

経営学部3年 佐藤 夏実さん
支援ボランティアサークル「ゆいまーる」所属

〈インタビュー、文章構成 東日本大震災石巻専修大学報告書第2号編纂ワーキンググループ〉

東日本大震災後、多くの学生も避難生活を送っていたが、その中で「何か助けになることをしたい」という思いを強くするものが多くいた。ある学生は自主的に避難所を手伝い、またある学生は地元の組織に加入して汗を流した。そんな中、本学に3つのボランティアサークルが結成された。平成23年8月に誕生したボランティアサークル「ゆいまーる」もその一つ。同サークルに所属する佐藤さんに、一年余の活動を振り返ってもらいながら、今後の課題を探ってみた。

〔ボランティアを始めたきっかけ〕

—自分にも何かできることはないか—

地震が起き、中里小学校に避難していた。このときは「何かできることはないか」と思ったが、一人ではどうすることもできなかった。その後大学の避難所(4号館)に身を寄せていた。電気が復旧したのを契機に石巻市内にあるアパートに戻ったが、時間をもて余すばかりだった。そんなとき、避難所を手伝っていた先輩に「来てみないか」と誘われ、特にボランティアという意識もなく避難所の子どもたちと遊んでいた。そこでNPO法人「にじいろクレヨン」※の代表である柴田さんと出会ったのがボランティアのきっかけ。私自身、子どもが好きだったこともあり、いっしょに遊ぶことで子どもたちのストレスをケアする活動に参加することにした。4月ごろには大学の避難所で子どもたちと遊ぶ活動をはじめた。

※「にじいろクレヨン」:震災直後から、とかく後回しにされがちな子どものケアを果たそうと、レクリエーション活動を数多くの避難所、仮設住宅地で実施。石巻市内に拠点を置くNPO法人、代表柴田滋紀

—いっしょにやろうよ—

「遊ぶことで子どもたちを元気にしたい」という目的で、「ゆいまーる」がスタートしたのが昨年8月。それまで私は個人で「にじいろクレヨン」の方々と共にボランティアをしていた。そんな私にサークルのメンバーが、「一緒にやろう」と声をかけてくれたのが「ゆいまーる」での活動のきっかけ。

※「ゆいまーる」は「助け合い」という意味の沖縄の言葉、代表理工学部4年 亀 英子

〔活動内容について〕

—寄り添うことを—

〈佐藤さんは、「ゆいまーる」での活動に加えて、「にじいろクレヨン」での活動や個人でのボランティア活動なども平行して行っている。〉

「にじいろクレヨン」の方々と一緒に行っているのが、仮設住宅地の集会所などで地域の子どもたちと一緒に遊び、体を動かしてストレスを解消させるといった活動。みんなが笑顔で遊べるように、そして年上の子が年下の子の面倒をみられるように工夫している。なかには宿

題持参で来る子どももいるが、「寄り添うことを大切に
する」という活動の理念に鑑み、「教えて欲しい」とい
う要望には応えるようにしている。

一口コミで集まる子どもたち

※佐藤さんが所属する山崎泰央ゼミでは研究室の
活動として、仮設住宅の支援活動、プレイパークな
どを通じて地域の子供たちの遊び場を考えたり、仮
設住宅の高齢者向けの足湯カフェなどを行っている。
佐藤さんはそのメンバーとしても活動している。



日曜日に大学のテニスコート脇で近隣の子供たちと
ボール遊びなどをしています。この辺りでは遊び場がな
くなってしまったこともあり、多い時で25人程度、平均
して15人前後とたくさん子どもたちが集まってきま
す。友達同士が一口コミで集まってくるみたいです。

【ボランティアをやって変わったこと】

ー子どもたちの変化ー

当初は警戒しているのか、乱暴な行動をとったり、暴
言を吐く、わがままを言ったかと思えば甘えてくる、そう
いった場面が多く見られ、相当ストレスがたまっている
ように見受けられた。それでも共有する時間が多くなる
につれ、徐々に攻撃的な言動は減り、「一緒に遊ぶのが
楽しい」と言ってくれたり、「今日も来てくれた!」と走り
寄って来てくれるまでに変化した。それが何よりもうれし
いし、活動を続けてきた成果だと思う。

ー自分自身も変わったー

始めたばかりの頃は「ボランティアをしに来ているの
だ」と気負っていたのかもしれない。「今日も来てくれ
てうれしい」と子どもたちに言われたのを境に、私自身
が「楽しい」と思えるようになった。今では「ボランティ
ア」という感覚があまりなくなっている。また、この体験
を経て、何かしたいと思うだけでなく「自分からやろう」
という積極性が出てきたと思う。



幼稚園から高校まで、ずっと保育士になりたいと思っ
ていたほど子ども好きなのだが、様々なことを考えた結
果、経営学部に進学した。これから就活がはじまるが、
ボランティア活動を行うことで、再び子どもに関わり
のある仕事に就きたいと強く思うようになった。また、この
活動を通じて社会人の方々と話す機会が増え、少しず
つ社会の厳しさも知ることができた。

1 大学の動き
平成23年4月

2 震災に関する
研究活動

3 大学施設の地域
催事への提供

4 震災の影響に関す
る全学調査結果

5 防災・減災のための
備蓄品調達状況

6 震災に関する
取り組み
インタビューによる紹介

7 震災2年目における
委員会等の活動と
本学の対応

8 阪神・東海に学ぶ

9 学内に結成された
ボランティアア
サークルの活動

震災に関する取り組み—インタビューによる紹介—

【やりがい】

ある子どもに「あのお姉ちゃん嫌い」と言われてショックを受けたが、しばらく通っていくうちに「来てくれた!」と言われるようになった。「嫌い」は実は好きの裏返しで、短期間で来なくなってしまう大人への警戒心だったのかもしれない。時間になって、子どもたちに「もう帰るの?」と言われると少し困るが、仮設住宅を離れても継続して遊びに来てくれる子どもたちの姿を見ていると、「少しは役に立っているのかな」とうれしく思う。

【総括】

—地震の怖さをともに経験したからこそ—

今回の震災で、たくさんの方が大変な思いをされているなか、私はケガをすることもなく、アパートにも大きな被害がなかったので、正直に言うと自分が被災者であるという意識はない。ただ、あの巨大地震の揺れの恐ろしさを経験しているので、それを表に出せずにストレスとなっている子どもたちの気持ちを少しはわかってあげられる。恐怖心をケアするお手伝いができないかと考えている。

—被災地の学生が行うボランティアの意味—

改めてこれまでの活動を振り返ってみると、毎日、避難所や仮設住宅地の集会所、あるいは談話室などで子どもたちと楽しく遊んでいたら、自然にその数が増え、活動の輪が広がっていったというのが実感である。この石巻に住み、石巻専修大学で学んでいたからこそ、自然に楽しい“遊び場”を形成することができたのだと思うし、今日まで継続してこれたのだとも思う。これは短期間で被災地を離れなければならない一般のボランティアの方々とは、大きく異なる点である。

—今後に向けて—

在学生にもっと積極的に参加してもらえよう、サークルの活動をもっとアピールすることが必要だったのではないと思う。また、短期間の参加では、子どもとの

信頼関係も構築できないので、たくさんの人に継続して参加してもらえ環境づくりが必要だと思う。

子どもたちに寄り添うボランティア活動をサークルやゼミを通じて行ってきたが、後輩たちにどう受け継いでもらうかが課題。現在、「ゆいまーる」のメンバーは7人(4年生5人、3年生2人)で、1、2年生がいない。ボランティアは一人でもできるが、これまでに得た経験やノウハウをみんなに受け継げれば、いざというときにすぐに動くことができる。できれば来年から新設される人間学部で、幼稚園教諭や保育士、小学校教諭をめざす後輩たちに中心になってもらい、大学でも地域の子どもたちと遊びを通じて支援ができる環境づくりができればよいと私自身は考えている。

【インタビューを終えて】

震災後、被災地では子どもを力づけようという試みが各種団体などによって行われてきた。しかし、被災地のニーズと合わなかったり、有名人頼みのイベントも多かったと聞く。子どもたちを真に力づける支援はなかなか難しい。「自分が楽しむこと」、「口コミを生かすこと」、そしてそれを引き出すため「息の長い活動をする」ということが重要であることを改めて教えられた。

本学開学時に結成されたボランティアサークルは部員数が減少して震災時には事実上休部状態だった。学生の自主性に任された団体の活動は、部員数の増減やリーダーの熱心度・知識によって大きく活性が変化する。このあたりは他大学のボランティア組織にも共通の悩みと聞く。地元自治体との連携や他大学との交流などをはかり、独りよがりでない知識を常に吸収する仕組みが必要だろう。

地方には地方の文化があり、県民性なども異なっている。また外部の人間にはわかりづらいローカルルールも少なくない。今回の震災でこれらの齟齬が無用な軋轢を生じたことは否定できない。是非とも

本学のボランティアサークルなどから、災害ボランティアのリーダー的人材が育成され、いざというときの力になってくれることを期待したい。



1 大学の動き
(平成23年4月)

2 震災に関する
研究活動

3 大学施設の地域
催事への提供

4 震災の影響に關する
全学調査結果

5 防災・減災のための
備蓄品調達状況

6 震災に関する
取り組み
インタビューによる紹介

7 震災2年目における
委員会等の活動と
本学の対応

8 阪神・東海に学ぶ

9 学内に結成された
ボランティア
サークルの活動